

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18271

研究課題名（和文）ACTに基づく糖尿病セルフケア行動の機能分類と介入プログラムの効果

研究課題名（英文）ACT-based functional classification of self-care behavior in patients with type 2 diabetes and the development of an intervention program

研究代表者

大屋 藍子 (Ohya, Aiko)

同志社大学・心理学部・助教

研究者番号：60781573

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、2型糖尿病患者の治療が患者の生活の質を維持することと両立しない点を問題と考えた。そこで、生活の質を維持しながらセルフケア行動を続けることを目指し、アクセプタンス&コミットメント・セラピー（ACT）に着目した。本研究は、まず2型糖尿病患者の行動とACTモデルの関連を検証した上で、それに応じたACTプログラムの開発を目指した。その結果、不安や思考への適切な対処の難しい2型糖尿病患者は治療の心理的負担やストレス性の摂食行動が見られた。こうした行動特徴を参考にACTプログラムを作成した。今後はACTプログラムの効果検証を実施する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、糖尿病の治療は効果的ではあるものの嫌悪感や煩わしさを伴うものであるために、その継続が難しかった。一方、本研究が開発したACTプログラムは、患者が望む人生指針を明確にし援助することで生活の質と糖尿病治療の両立を目指す。したがって、本研究の成果は、患者の治療ドロップアウトの減少に寄与する社会的意義を持つ。また、研究期間内で実施した糖尿病患者のセルフケア行動とACTモデルの関連が明らかになった。本領域の研究において基礎的知見となるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study considered the treatment of patients with type 2 diabetes as incompatible with maintaining their quality of life. Therefore, we focused on the use of Acceptance and Commitment Therapy (ACT) with the aim of continuing self-care behavior while maintaining the quality of life of patients. In this study, we examined the relationship between the behavior of type 2 diabetic patients and the ACT model. With these observations, we aimed to develop an ACT program accordingly.

As a result, patients with type 2 diabetes who had difficulty in appropriately dealing with anxiety and thoughts, showed a psychological burden of treatment and stressful eating behaviors. The ACT intervention program was created with reference to these behavioral characteristics. In the future we will verify the effects of this program.

研究分野：臨床心理学

キーワード：2型糖尿病 セルフケア QOL アクセプタンス&コミットメント・セラピー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

糖尿病治療においては、患者の自発的なセルフケア行動を拡大・維持させることが重要となる。しかし、即時的で確実な減量や生活習慣の改善の提供は難しく、しばしばセルフケア行動に困難を抱える患者が存在する(木村, 2009)。セルフケア行動の失敗や困難は治療に対する負担感へと繋がり、生活の質(QOL)を低下させてしまう(圓増, 2010; 石井, 1996)。患者のセルフケア行動の拡大・維持は、当事者のQOLが向上されながらである必要があり、そのための心理・社会的援助の充実が望まれる。

当事者のQOLを向上させながら行動変容を促す心理的アプローチとして、本研究はAcceptance & Commitment Therapy:ACTを採用した。しかし、ACT援助プログラムがセルフケア行動に及ぼす効果に関しては、それまでに、Gregg et al.(2007)以降新たなエビデンスが発表されていなかった。Moghanloo, Moghanloo, & Moazezi (2015)の研究では、ACTが糖尿病における罪悪感や抑うつ感を緩和することを示している。ACTが有効である糖尿病患者のセルフケア行動には、抑うつ感や不安に囚われ人生の価値が不明確であるといった心理的柔軟性モデルによって捉えられる特徴が見られると考えられる。したがって糖尿病へのACTを開発するためには、ACTの心理的柔軟性モデルの適用が予測される糖尿病患者の行動特徴を明らかにした上で、その特徴に基づいた介入プログラムを開発する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、ACTの心理的柔軟性モデルを適用できる糖尿病患者の行動特徴を検討し、ACTがセルフケア行動の拡大に及ぼす効果を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、糖尿病のセルフケア行動の拡大に及ぼすACTの効果を検討するため、次の3つの研究で構成された。研究1: ACTの心理的柔軟性モデルを用いて糖尿病患者の行動特徴を把握する。研究2: 患者の行動特徴に沿った糖尿病改善プログラムの作成・予備的検討。研究3: 糖尿病改善プログラムの効果検証であった。

研究1では、国立循環器病研究センター糖尿病・脂質代謝内科へ通院・入院する糖尿病患者を対象に、ACT心理的柔軟性モデルの要素に関する質問票・生活習慣を尋ねる質問票・治療への心理的負担を尋ねる質問票への回答を依頼し、データを収集した。

研究2では、患者の行動特徴に沿った糖尿病改善プログラムを作成し、少人数の糖尿病患者に対して効果を検討した。

研究3では、プログラムを改善した上で、その効果を検証するために無作為比較試験を行う予定であった。

4. 研究成果

研究1を実施し、研究成果を大屋他(2019)2型糖尿病患者の疾患に対する回避とセルフケア行動の関連.糖尿病, 62, 748-754.としてまとめた。研究は、糖尿病に対する回避の程度とセルフケア行動の関連を確認し、心理的柔軟性のパターンによってセルフケア行動に違いがあるか検討を行うことを目的とした。124名の2型糖尿病患者に対し、糖尿病に対する心理的態度やセルフケア行動の程度について質問紙調査を実施した。その結果、糖尿病に対する回避の程度が高い者は糖尿病に関する心理的負担が高く、情動的摂食や外発的摂食の傾向も高いことが示された。また、階層的クラスター分析を行った結果、行動先行型・非行動型・行動柔軟型の3つのクラスターが生成された(図は大屋他(2019)をもとに作成した)。中でも人生の価値が明確でそれに応じた行動がとれるものの不安や思考への適切な対処が難しい「行動先行型」の患者は、日常での運動頻度が高い一方、心理的負担や情動的摂食の程度も高く、心理的問題の存在が示唆された。2型糖尿病患者には心理的狀態に応じたセルフケア行動の特徴があり、それを考慮した糖尿病教育が必要であることが示唆された。

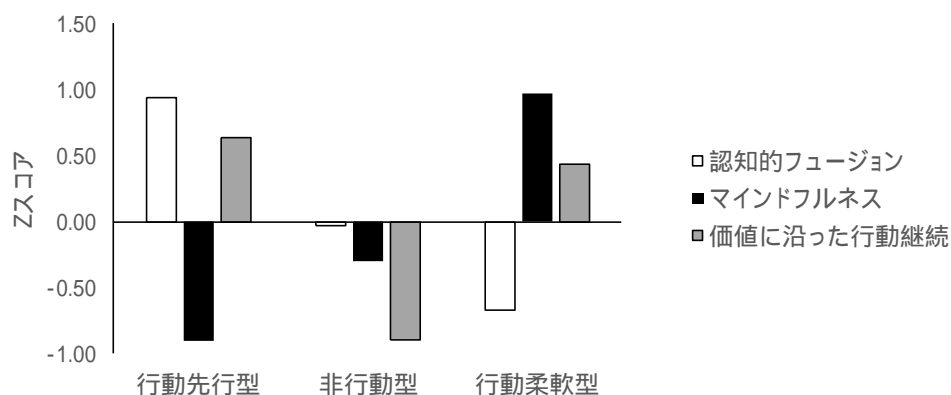


図 研究1で得られたクラスタと、認知的フュージョン、マインドフルネス、価値に沿った行動継続のzスコア

注) 認知的フュージョンは、CFQ:Cognitive Fusion Questionnaireを用いて測定した。マインドフルネスはMAAS:Mindful Attention Awareness Scaleを用いて測定した。価値に沿った行動継続はVCQ:Values Clarification Questionnaireを用いて測定した。

行動先行型は価値に沿った行動が継続する一方認知的囚われが強いクラスタを示し、非行動型は価値に沿った行動が不十分で継続されないことが特徴的なクラスタを示し、行動柔軟型は価値に沿った行動がある程度継続し認知的囚われも少ないクラスタを示す。

研究2については、科研費補助期間中に倫理審査の承認手続きまで実施した。今後、少人数の対象者を募集し研究を継続する。

引用文献

大屋藍子・槇野久士・孫 徹・椽谷真由・玉那覇民子・大畑洋子・肥塚 諒・松尾美紀・河面恭子・藤井紀子・金子春恵・河合幸枝・福島佳織・万福尚紀・細田公則・武藤 崇(2019). 2型糖尿病患者の疾患に対する回避とセルフケア行動の関連. 糖尿病, 62(12), 748-754.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大屋藍子・榎野久士・孫徹・椽谷真由・玉那覇民子・大畑陽子・肥塚諒・松尾美紀・河面恭子・藤井紀子・金子春恵・河合幸枝・福島佳織・万福尚紀・細田公則・武藤崇	4. 巻 62
2. 論文標題 2型糖尿病患者の疾患に対する回避とセルフケア行動の関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 糖尿病	6. 最初と最後の頁 748-754
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Aiko Ohya, Hisashi Makino, Mayu Tochiya, Yoko Ohata, Ryo Koezuka, Kiminori Hosoda, Takashi Muto
2. 発表標題 The relationship between avoidance of disease and self-care behavior in patients with type 2 diabetes
3. 学会等名 the ACBS (Association for Contextual Behavioral Science) World Conference 18th (Dublin, Ireland) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大屋 藍子
2. 発表標題 食行動と行動分析学-肥満症患者に対する行動分析的アプローチ
3. 学会等名 日本行動分析学会第36回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大屋藍子・榎野久士・細田公則・孫徹・椽谷真由・玉那覇民子・大畑洋子・肥塚諒・松尾 美紀・藤井紀子・金子春恵・福島佳織・河合幸枝・万福尚紀・武藤崇
2. 発表標題 2型糖尿病患者の心理的柔軟性とセルフケア行動の関連
3. 学会等名 ACT Japan 年次ミーティング
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----